

# てんまつんじん

## 年首御慶

乙酉元旦

|                        |     |
|------------------------|-----|
| 表紙解説                   |     |
| 「束帯天神像」……………           | 2頁  |
| 銚流神事斎場の改修……………         | 3頁  |
| 平和のための世界集会……………        | 4頁  |
| 「柘榴天神」について……………        | 6頁  |
| 第二回「てんまつ天神梅まつり」予告…………… | 8頁  |
| 能の神楽について……………          | 10頁 |
| 境内散歩②                  |     |
| 丹頂鶴のいた神園……………          | 12頁 |



束帯天神像

## 表紙解説

## 「束帯天神像」

大阪天満宮蔵  
 縦一三三・八〇 横五二・一〇  
 絹本着色 江戸時代

大阪工業大学助教授 松浦 清

様々な図様が知られる束帯天神像は、坐像で表現された作品が多く伝存します。それらは普通、上置や円座、あるいは褥などを敷き、綱を円座風に巻きつけた綱敷天神の伝承を表現した作例や、敷物を描かない作例もまま見受けられます。

渡唐天神像が一般には立像で描かれるのに対して、束帯天神像を立像で表現した作例は比較的少なく、鎌倉の荏柄天神社の草創縁起に結びつく「雲中天神像」が、その代表といえるでしょう。作例としては荏柄天神社のほか、奈良の葉師寺にも伝存し、大阪天満宮にも「右都御史印」の朱文方印が捺された玉案の伝承作品が所蔵されています。しかし、それ以外の形式で表現された束帯姿の立像は、近世以前の作例としては稀で、ここに紹介する天神画像は殆ど類例を見ない珍しい作例です。

図様は、梅花文のある黒の袍と表袴を着用し、笏を執って直立する束帯姿で表現されていますが、幘頭を

思わせる独特の形状の冠、二条の平緒、花形の鼻先を持つ錦鞋（浅沓）など、通常の束帯天神像の着衣形式とは大いに異なり、また、特異な形状の台座ないし敷物を敷いている点も注目されます。

このような束帯天神像は類例が極めて少ないのですが、興味深いことに、山口県の防府天満宮には同様の作例が三幅伝わっています。そのうちの一幅には表装裏に「三季天神」との題箋と「祈念山常禪院」の貼紙があり、さらに長文の識語を記す貼紙があります。この識語によれば、白倉若狭守なる人物が旧蔵して高野山実相院谷中之坊に寄進した菅公の画像を、毛利輝元が長門満願寺の尊信に写させて安置した事例があり、防府天満宮の円楽坊の法印良英も中之坊に懇望して天神像を写させ、毛利綱広の武門繁栄・邦国安泰を祈願して円楽坊に安置したと記されています。寛文三年（一六六三）の年紀も記されています。

防府天満宮には、この「三季天神」像と同じ図様でほぼ同寸の作例と、やや小ぶりで簡略化された作例が伝存するので、今それぞれを仮に、甲本、乙本、丙本とします。

「三季天神」という名称の由来は不明で、識語の内容についても今のところ裏を取るまで至っていませんが、作品そのものを見ると、興味深い表現のあることに気がつきます。

それは甲本の随所に原本からの写し崩れが多く見られる点です。右頸部が盤領の裏地の朱で彩色され、黒の袍の裾付近の裏地が白で彩色されているのは、賦彩に関する誤りです。し、表袴の裾下を褐色で平滑に賦彩するのは錦鞋の上面の輪郭線を写し洩らした運筆の誤りです。乙本に、この写し崩れが見られないことは注目すべきでしょう。乙本の敷物は仏画の

十二天などに描かれる毘座といわれる毛氈で、この作品の方が原図に忠実に写されていると考えられます。丙本は更に簡略化され、毘座の原形を失っています。大阪天満宮本はその丙本の敷物と同様の形状をしていますから、本来は毘座を意図して描かれたものでしょう。

毘座は天部の敷物ですから、この図像は天神を仏教における天部として位置づけたものと解釈されます。甲本の識語を重視すれば、大阪天満宮本の原本は高野山の真言密教における護国思想を背景とした神仏習合の産物であるかもしれません。京都の六角堂能満院に伝来した仏画粉本の中に、勢州津大寶寺安置の「水鏡ノ天満宮」との墨書のある同様の図像粉本があるのも注目されます。

（大阪工業大学助教授 松浦 清）

「三季天神」像・甲本 山口・防府天満宮蔵





# 鉾流神事斎場の改修

毎年、天神祭宵宮（七月二五日）の朝に行われている「鉾流神事」の斎場が、近く大幅に改修されることになりました。

現在、大阪府が進めている大川（旧淀川）の治水事業の一環として、斎場に接する堤防も改修計画の対象となったものです。過日、西大阪治水事務所から当宮に対して工事内容についての提案がありました。

その提案によれば、全国的に改修



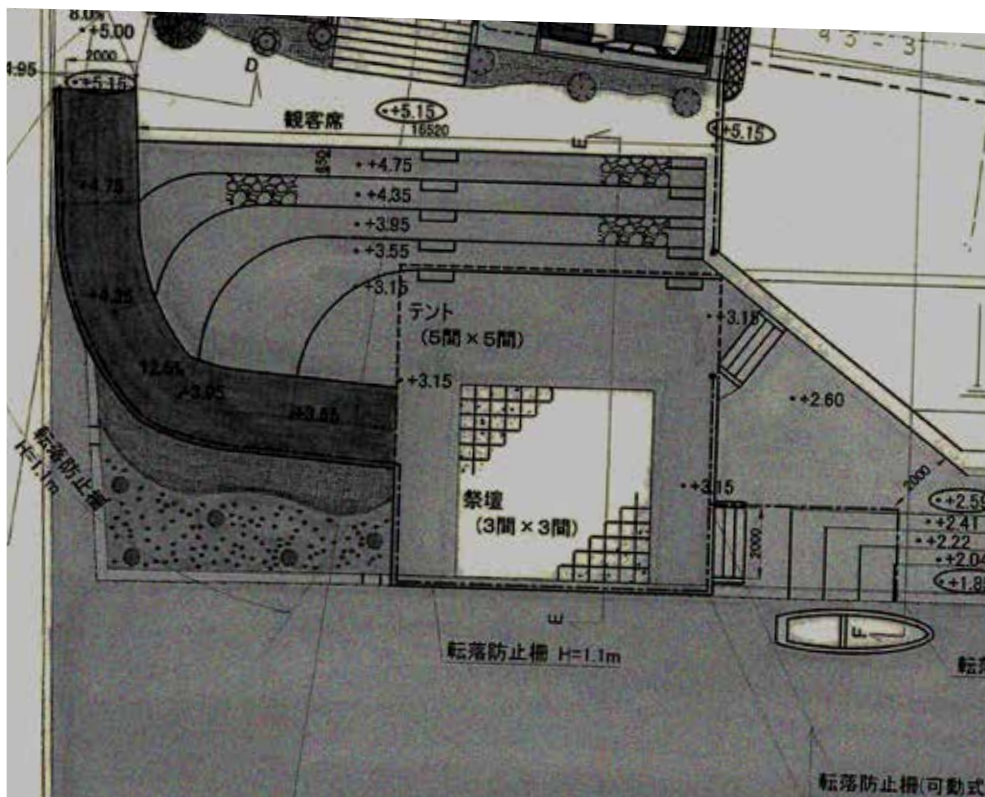
の基準が緩和されたことに伴う「スーパー堤防」方式が採用されています。それは、既存の堤防の高さを変えないでも、その役割を果たし得るのであれば、例えば緩やかな階段状の堤防に改修することも認められるという考え方を利用したものです。

計画によると、現在の所有地境界線から階段状の堤防とし、河畔部分には、平面の広場を確保して親水区域とします。この広場は鉾流神事の際には、斎場として使用します。

従来は、堤防内側の斎場に着席している参列員・拝観者は、鉾を流す場面を見ることができず、鉾を流す様子を見るには、鉾流橋の上に移動しなければなりませんでした。

しかし、この計画による改修が行われると、斎場内からも川面を望むことができ、平安時代の手ぶりが復興されることになります。

また鉾流橋の袂からスロープをつけることによって、一般の人も私有地を通過せずに、親水区域に降りることが可能となります。このほか水際の一部には、砂利浜を復元するこ



とによって、昭和五年に鉾流神事が復活された当時の姿に戻す試みもあ

ります。

ていますので、早ければ来平成十七年の天神祭鉾流神事には、改修された鉾流斎場で、昔の風情を取り戻したお祭りを拝観できるかも・・・。

# イタリア・ミラノで 『平和のための世界集会』

権祿宜 柳野 等

## ◆六十カ国からミラノへ

去る九月五日から七日まで、イタリアのミラノにおいて第十八回「平和のための世界集会」が開催されました。

同会は世界平和実現のためには対話が必要であることを全世界に訴えようとするもので、今回は「宗教と文化・新たなヒューマニズムへの勇氣」をテーマとして、六十カ国から五十余の教派・教団、各国政府関係者らが参加しました。

わが国からは、神社本庁の松山文彦理事（東京大神宮宮司）を団長に、全国の神社から派遣された神職ら十二人からなる代表団が派遣され、当宮の柳野等権祿宜も一員として出向しました。また大本教、比叡山天台宗、臨済宗、曹洞宗、天理教、立佼成会なども参加されました。

この集会を主催するのは、イタリア・ローマを拠点とするカトリック信徒の社会奉仕団体「セント・エジディオ共同体」で、昭和六十一年ローマ法王の呼びかけに応じた世界の

宗教者がイタリアのアッシジに集まって「平和の祈り」を行ったのが初まりで、翌年から毎年、同共同体の主催によって開催されています。

## ◆平和のための世界集会

本年はキリスト教各派をはじめ、イスラム・ユダヤ教・仏教・ヒンドゥー教など、多数の宗教指導者だけではなく、各国政府関係者、研究機関職員、平和活動団体員らも参加されていました。初日は、ミラノ市内中心に位置するミラノ大聖堂（ドゥオモ寺院）で、開会式に先立ってミラノ大司教による記念のミサが行われました。神社本庁派遣団も、主催団体であるセント・エジディオ共同体の精神的支柱であるキリスト教に敬意を表してミサに参列しました。夕刻からはアルチンボルディ劇場で開会式行われました。

## ◆開会式

式典の第一部では、まずミラノ大司教であるディオニジ・テッタマンジ枢機卿、ミラノ市長のガブリエーレ・アウベルティニ氏が開催都市

を代表して歓迎の言葉を述べられ、続いてイタリア外務大臣のフランコフラッティニ氏、セネガル共和国大統領のアブドレイエ・ワデ氏らがそれぞれスピーチを行い、異文化・異宗教間における対話の必要性や、イデオロギー

などに囚われない新しいヒューマニズムの可能性について言及されました。

第二部においては、セント・エジディオ共同体創設者の一人であるアンドレア・リツカルディ教授が、宗教者による対話の必要性や、国家間・民族

間紛争において宗教者が果たし得る役割について話されました。

このほかイタリア司教団長のカミッロ・ルイーニ枢機卿らの参加者がスピーチ。キリスト教徒・ユダヤ教徒・イスラム教徒としての立場から

混乱の度合いを増す世界情勢のなか一層の他宗教間対話の必要性を強調されました。

なかでもロシア聖教の司教団代表者が、この集会の直前九月一日に発生したロシア南部北オセチア共和

## «Solo la pace è santa, non la guerra»



国での小学校占拠テロ事件について報告し、凶弾に倒れた児童をその手に抱き、目の当たりにされた惨状を報告されると、場内が沈痛な雰囲気となり、激しい憤りとともに、ある種の無力感を感じずにはいられませ

んでした。

特にエッセディネ首長顧問は、穏やかな口調で、西洋文化圏では誤解されがちなイスラムの信仰について語り、キリスト教との共通点を紹介しながら、他の宗教と同様に平和を求める信仰であることを説明され、神の名を用いたテロ行為に対して遺憾の意を述べられました。

#### ◆分科会

第二日には、三十五のテーマによる分科会がミラノ市内各所で開催され、神社本庁派遣団はマリOTTホテル内会議場で「日本の宗教的ヒューマニズム」についての討議に参加しました。

松山団長は、約百五十名のミラノ市民の前に、ロシア学校占拠テロ事件の犠牲者に哀悼の意を表した後、世界平和実現のためには何よりも一人ひとりの自覚が必要であることを訴え、神社神道の根幹を為す思想として『敬神生活の綱領』の「世のため人のために奉仕し…」と「世界の共存共栄を祈ること」の二節を引用して、心の和を大切にする神社



神道の特徴を説明されました。

#### ◆世界平和祈願祭

最終日の夕刻には、市内各地で各宗教の儀式によって「平和の祈り」が捧げられました。神社神道は、イ

ルデフォンソ・シュスター・ミラノ大司教邸の中庭を齋場として「世界平和祈願祭」を斎行し、茨城県の佐波波地祇神社の伊藤昭武宮司様が齋主をお務めになり、約二百人の参列者と地元報道関係者が見守るなか厳粛に執り行いました。

セント・エジディオ共同体を代表してフェデリカ・バツサーニも参列され、玉串を奉って拝礼、祭員とともに祈りを捧げました。

祭典終了後の直会では、人々に御神酒が振る舞われましたが、異宗教の信徒であっても神聖な儀式に参加できる「神道」の寛容さに、賞賛と感嘆の声が寄せられました。冊子『神社へようこそ』（神社本庁刊）もあつという間に配布してしまい、松山団長へのテレビ取材も、順番待ちの列ができるほど、神社神道に対する関心の高さが窺われました。

#### ◆平和大行進と閉会式

祭典後、各祈願所から宗教者は、閉会式会場であるミラノ大聖堂へ行進し、交差点ごとに合流を繰り返して、大聖堂裏では東洋・西洋の二大行進が集結して、会場へ入場しました。大聖堂前の大広場は、市民で埋め尽くされ、外周の建築物の窓からも渦のような拍手が巻き起こりました。

閉会式は、ローマ法王の使者、イタリア大統領代理の外務大臣によってメッセージが読み上げられ、平和宣言調印式が行われました。最後に参加者全員が握手を交わして、世界平和実現に向けて意志を再確認し合い、閉幕しました。

#### ◆セント・エジディオへ表敬訪問

世界集会終了後、神社本庁派遣団はローマにあるセント・エジディオ共同体の本部を訪問し、アルベルト・クワトルツチ事務総長と面談、社会の高齢化などについて意見交換し、その後、同共同体運営の老人福祉施設を訪問。入所されている高齢者の皆さんは「遠い日本国から聖職者さんたちがお訪ね下さった」と大変喜んでいらつしました。

この後、ヴァチカン市国、サンピエトロ寺院の視察拝観等の日程があり全九日間の旅程を無事に終え、帰国の途に着きました。

「世界平和」といえば、平素は他人事のように思い過ごしていましたが、この世界集会への参加によって、その実現を自分自信の問題として真摯に向き合うことが、やがて真の世界平和への礎と成ると感じました。このような機会を与えてくださった御神恩に感謝いたします。



## ◆はじめに

神社や寺院などの由来についての説話を「社寺縁起」といいます。各地の社寺には、膨大な社寺縁起が伝えられています。中でも最も数多く作られ、バリエーションに富むのは「天神縁起」だといわれています。それは、天神信仰が広く深く浸透したことの結果であると同時に、波瀾に満ちた菅公の御生涯や、天神信仰の成立に至る劇的な怨霊譚が、ダイナミックな縁起物語を可能にした結果でもあるのでしょうか。

「天神縁起」では、菅公の御生涯から、怨霊の祟り、天満宮の創祀に至る物語が、様々な伝説で彩られています。そのうちの「飛梅伝説」については、当社報の前号で考察しましたので、今号では「柘榴天神」の伝説を紹介するとともに、その意味について考えてみましょう。

## ◆柘榴天神伝説のあらすじ

柘榴天神の伝説とは、次のようなものです。

菅公が太宰府の謫居で没して間もない頃、比叡山の法性房尊意のもと

に菅公の霊が現れた。菅霊は「今から無実の罪で左遷された恨みを果たすために内裏に向かう」と告げ、「天皇が、尊意の法力で菅霊を鎮めるようにと命じても参内しないでしょう」と尊意に頼んだ。しかし、尊意は「天皇から命じられたら、三度目には参内せざるをえない」と拒み、ザクロを菅公にすすめた。怒った菅公はザクロを口に含み、それを妻戸に吐きかけると、炎となって燃え上がったが、尊意の法力で鎮火したと

実はこの後、尊意は内裏に向かうのですが、菅霊は賀茂川を氾濫させ、その行く手を妨げます。しかし、こ

こでも尊意は法力によって洪水を左右に分かつて川を渡ります。

まるで『旧約聖書』にみえる「モーゼの奇跡」のようです。エジプトで迫害を受けていたイスラエル人を助けるため、モーゼは彼らを率いてパレスチナに向かうのですが、追手に紅海の海岸まで追い詰められます。このとき、モーゼが杖を高く掲

## 柘榴天神伝説の原型

高島 幸次

いう。

以上がそのあらすじです。ここに現れる尊意とは、第十三代天台座主であった法性房尊意（八六六〜九四〇）のことです。

げると、紅海は真つ二つに割れて海底が道となって出現したという奇跡のことです。

その類似性に驚きますが、それはともかく、ここでも尊意が菅霊に優っています。これらの天神伝説が成立する課程で、天台教団が深く関与した結果なのでしょう。

しかし、ここで問題にしたいのは伝説成立の背景ではなく、尊意が菅霊に勧めたザクロのことなのです。

菅霊と息詰まる対決の中で、尊意は

なぜザクロを勧めたのでしょうか。「喉が渴いたでしょう」というもてなしならば、普通は飲み物を勧めると思うのですが。なぜザクロなのか。

## ◆「ザクロ」ではなく「ツバキ」か

もちろん、ザクロが不死のシンボルだったとか、呪術性を持っていたとか、あるいはザクロの赤い実が炎を思わせたとか、それらしい意味付けは可能でしょう。それでも、私には、尊意が唐突にザクロを勧めたことが不自然に思えてしかたないので

す。そこで私は、尊意は「ザクロ」を勧めたのではなく「灯明」を用意したのではないかと考えました。

菅霊との対談が長引いて日も暮れかかったため、尊意は「灯明」を灯したのです。業を煮やした菅霊はその灯明油を口に含み吐き出した。灯明油ですから燃え出しても不思議ではないでしょう。

そういえば、油を口に含んで炎を吐く大道芸がありますよね。あのイメージです。果たして、平安時代にあのような芸があったか否かについては算聞にして知りませんが……。そして、ここがポイントなのです

が、その灯明油は「ツバキ油」だったに違いない。これは、単に油なら燃え上がるだろうという連想からだけではない。実は古代には「ツバキ」を「海柘榴」と表記していたからなのです。

もともと日本から中国に伝わった「ツバキ」は、中国では「海柘榴」や「海石榴」「海榴」などと書かれ、それが日本に逆輸入されたため、日本で作られた「椿」の字と併用されたのです。そして「ザクロ」は、「柘榴」と書きます。

「柘榴」と「海柘榴」、この字面の相似によって、両者が混同されたのではないかと、というのが連想の基にあります。

#### ◆『古今和歌六帖』も混同

事実、古代に「柘榴」と「海柘榴」を混同している事例がありました。平安前期に編纂された『古今和歌六帖』には、『万葉集』などから四千首以上の和歌が、「歳時」や「草虫木鳥」などに分類して収録されています。その「椿」の項目に四首、「ザクロ」の項目に一首を収めています。「ザクロ」に分類された一首とは次のものです。

足曳の山石榴咲く八みね越し  
鹿待つ君が祝ひまつかも

『万葉集』の原文では「山海石榴」とあり、「ヤマツバキ」と読むべきなのですが、編者は「山石榴（ヤマザクロ）」と勘違いしているのです。念のため、『新日本古典文学大系』（岩波書店）で、同歌を確認しておく次のように見えます。

あしひきの山椿咲く八つ峰越え  
鹿待つ君が斎ひ妻かも

#### ◆初瀬の海柘榴市

そういえば、日本最古の市といわれる「初瀬（長谷）」の椿市（つばいち）（現 奈良県桜井市）も、『万葉集』などでは「海柘榴市」と記されています。

『源氏物語』玉鬘の巻では、初瀬の「椿市」で灯明油を買う場面もあります。この灯明油が椿油だとの確証はありませんが、椿市での買い物ですからね。

しかも『枕草子』によれば、椿市は「長谷に詣づる人のかならずそこにとまる」とあるように、「長谷寺詣」の人びとが必ず立ち寄ったといえます。その長谷寺には伝菅原道真筆「長谷寺縁起文」があつて…、



「菅霊、法性坊に現して柘榴を吐たもう図」（『天満宮御絵伝』部分）

というとあまりに連想が過ぎるでしょうか。

#### ◆おわりに

以上のことから、「柘榴天神伝説」の原型では、菅霊は「柘榴」ではなく「椿油」を吐き出したと考えたわけですから、それがいつの頃にか、字面の相似から、「柘榴」と誤って伝えられたのではないかと。このように考えると、唐突に柘榴を勧めるという不自然さも解決し、燃え上がったことにも納得がいくように思うのですが、如何でしょうか。

実をいうと、口から吐くものだから「唾（つばき）」の音からの連想もあったといいたところですが、そこまでいうと、これはもう言葉遊びのようになりましますから、控えておきましょう。



## 《予告》

# 第二回「てんま天神梅まつり」 今年から「夜間拝観」も

本年の一月二十九日(土)から二月二日(日)までの三〇日間にわたり、第二回「てんま天神梅まつり」を開催いたします。

昨年は、第一回ということもあり、不行き届きの点や、不慣れによるご無礼も多々あったと存じますが、皆様の暖かい励ましをいただき大過なく終わらせていただきました。お陰様で、予想外の多くの皆様に御来宮いただきましたこと、改めて御礼申し上げます。

◆大盆梅展 ― 天神様と梅 ―  
さて、本年は昨年の経験をもとに、より一層充実した「梅まつり」を実現するため、様々な企画を練っております。

まず、昨年に大好評をいただきました「盆梅展」を、今年も参集殿において開催いたします。樹齢二〇〇年を超える老梅の見事な枝振りをお楽しみ下さい。もちろん、昨年と同様に、当宮所蔵の「天神画像」(三幅)と「御迎人形」(二体)を併せて展示するとともに、当宮巫女手作りの「梅の木餅」を、

今年の「夜間ライトアップ」のイメージ。

餅」や、梅毘布茶などもご用意しています。  
また本年から、期間中の二月二日(土)から二月二〇日(日)まで、夜間拝観(午後八時まで)を実施いたします。ライトアップされた社殿には、東帯などの神職の装束も展示し、境内は平安朝の幽玄に染まることでしょう。盆梅展の他には以下のような企画が進行中です。お楽しみに！

◆なにわ七幸まつり(2月6日)  
野菜・果物や日用雑貨の店が、境内所狭しと並びます。

◆本殿通り抜け参拝(日程は調整中)  
御本社東西の「登龍門」を開扉し、天神様おそば近くでお参り頂きます。

◆和裁教室(2月13・27日)  
当宮梅香学院の和裁講師指導のもとに、梅模様の巾着袋、貝や人形のストラップなどを作って頂きます。

◆梅・挿絵教室(1月30日・2月12日)  
上田学園大阪総合デザイン専門学校の講師の指導により、葉書サイズの挿絵や貼り絵を体験頂きます。

◆梅御膳(期間中の土日)  
当宮門前の老舗「相生楼」において、期間中限定の「梅御膳」をお召し上がりいただけます。

◆ふるまい梅餅(2月27日)  
当宮周辺の氏子青年団(青年親睦会)のご協力により、参拝者に梅入り餅が振る舞われます。



今年の「梅御膳」イメージ



中庭で「梅の木餅」に舌鼓。

◆古本市(2月10・16日)  
毎秋に「天神さんの古本まつり」を開かれていた大阪古書研究会のご協力により「古本市」が開かれます。

◆境内オーブンカフェ(期間中)  
境内に「茶屋」を仮設し、軽食梅うどん・おでんなどをご用意いたします。

◆天神天満せともの市(2月18・27日)  
大阪陶器商の有志の皆さんによる瀬戸物市では、日本中の器が大集合いたします。

◆梅まつり土産販売(期間中)  
梅まつり期間限定のオリジナル土産(梅をモチーフにした鈴など)を取りそろえております。

◆プラムフェスティバルアンバーサリーファッションショー(2月18日)  
プロのデザイナーとモデルによるファッションショーを境内で繰り広げます。

◆ソプラノ独唱(2月16日)  
◆神話朗読(2月17日)

この他、ソプラノ歌手の高野久美子さんの独唱や、元関西テレビアナウンサーの和田明紀子さんの神話朗読など、実に多彩な企画を温めております。

築山に色とり取りの梅。



「盆梅展」の会場入口風景。



「盆梅展」では御迎人形がお出迎え。



「梅御膳」を召味中。



数々の老梅が整然と。



# 能の神楽について

永原 順子

## 一、はじめに

能の魅力の一つは舞である。武士、天女、精霊、遊女など様々な主人公（シテ）が様々な思いを込めて舞う。能の舞は、地謡と囃子で舞う舞と、囃子だけで舞う舞とに大きく分類される。後者は、ある程度表意的な所作をする（動作）と、抽象的な純粹舞踊である舞事とにわかれる。この舞事の一つに、天女、巫女、女神が御幣を携えて荘厳に舞う「神楽」がある。神社での神楽は、神への奉納として位置づけられるが、能の神楽はどのような意義を持つのかに迫ってみたい。

## 二、能の起源と神楽の場から能へ

能・狂言は猿楽を源流として発展してきた。本来の猿楽は、物真似、寸劇、曲芸、歌舞などを含んだ滑稽な雑芸で、そこから能が生まれてきたのだが、「能」という名称が生まれてからも、「猿楽の能」という呼び方も江戸にいたるまで使われた。世阿弥はその著書『花伝書』の中で、申楽は神楽が起源であると主張する。

一、申楽、神代の始まりといふは、

天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、（中略）神楽を奏し、細男を始め給ふ。（中略）その時の御遊び、神楽の始めと云々。委しくは口傳にあるべし。（中略）上宮太子、末代のため、神楽なりしを、「神」といふ文字の偏を除けて、旁を残し給ふ。これ、日よみの申なるが故に、申楽と名附く。即ち、樂を申すによりてなり。または、神楽を分くればなり。

### 「第四 神儀云」

「神楽」の「神」から「ネ」とすると「申楽」になるというのである。本来の猿楽が持つ滑稽なイメージを払拭するためか、あるいは新興芸能の正当性を誇示するためか、神楽との関係性を端的に表したのであるが、もちろんその関係性は単に文字遊びだけのものではない。

神楽といふのは、神座に神をお招び申して、託宣を聞き、或は息災、長命を祈り、五穀の豊穡を希ふ神事である。

と本田安次氏が指摘するが、この神事の行われた場での酒宴とともに、

種々の芸能も行われたという。それらは繰り返されるうちに固定し、さまざまな形の神楽（民間の里神楽）が生じていく。この中に猿楽、つまり黎明期の能も取り入れられていた。種々の芸能と同様、能もその源流を神楽の場に遡ることができ。

## 三、舞「神楽」の誕生

その後観阿弥が、能を神事芸能から歌舞劇として展開させ、さらに世阿弥が、囃子にあわせて舞う舞を充実させた。このころ、神楽が「舞」として能の中に取り入れられていったようだが、当初は「神楽の舞歌」、すなわち神前で舞われる舞の一般称で、現行の神楽とは異なっていたといわれる。しかし観阿弥世阿弥以降、彼らに続く能作者たちが、様々な曲をつくっていくにつれ、舞も多様化の時代を迎える。当時の記事に、

### 「獅子」神

「獅子」神

「獅子」神



写真1 能「龍田」

足拍子や扇の開閉などでシテが舞の寸法を決める、シテ本位の舞であるといわれる。（ただし現在では、流派による違いこそあれ、寸法はどちらの部分もほぼ一定である。）

（2）神楽特有の所作

が成立した。神楽の中の一つのジャンルとして位置していた能楽が発展し、それ自身の中に、舞として神楽を取込んでいったのである。

## 四、舞事「神楽」の特徴と意味

神楽が舞われる能（現行曲）は九曲で、舞う主体は女神、天女、巫女、遊女などである。（表参照）

神楽の舞の特徴として以下があげられる。

### （1）神楽の構成

実は神楽は神楽部分と神舞部分から成る（神舞は神体が颯爽と舞う独特の曲で使用される）。前半の神楽部分は、シテが御幣を持って舞い（写真1）、囃子と舞の型の寸法が規定どおりに行われる囃子本位の舞であるのに対し、後半の神舞部分は、シテが扇に取り替えて舞い（写真2）、

後半の神舞部分となる前に、舞手が上体をかがめて舞台を斜めに横切るという、神楽にしかない所作がある(写真1)。それは、鳥居をくぐってそこから神となることを示唆しているのだという口伝がある。

### (3) 神楽の位(表参照)

神楽を舞う主体が、シテ(主人公)かツレ(主人公に準ずる役)か、神靈か人間か、などによつて、舞の内容が非常に細かく規定されている。

写真2 能「龍田」



また、神楽の唱歌(笛の旋律を口で唱える方法は、「ラアラ」というくぐりがよく出てくる。これは、鎮魂、魂ふりを意味するとも言われている。それを増している。それを増している。それを増している。

楽になることもある。以上の特徴を総合すると、神楽部分は巫女が、後半の神舞部分は神が舞うという区別をつけており、神舞になると扱いが重くなっていることがわかる。

前半で御幣を持って神楽を舞うことによって神がおりてきた舞手は、神として颯爽と神舞を舞うのである。

五、まとめ  
神楽は能の成立と深く関わる一方で、能の中に舞として取り込まれてきた。舞の神楽では舞手に神が降りることが見事に象徴されており、原始祭祀の名残もみることができ。

一方で、全国各地に流布している神楽との共通点(天岩戸神話の再現、

祈祷の神楽など)も確認できる(表参照)。神と人間との交歓の場が舞台に再現されるのである。

舞や謡は時代と共に変遷し、当時の姿をそのままとどめる、というわけにはいかないが、その構成や基底をなす精神は能に生き続けている。能は、芸能や祭祀の場を今に伝えているタイムカプセルともいえる。

### 【参考文献】

- 天野文雄『現代能楽講義』大阪大学出版会2004・3  
森田光春編『森田流奥義録』能楽書林1980・4  
西野春雄・羽田昶編『新訂増補能・狂言事典』平凡社1999・6  
味方健『能の理念と作品』和泉書院1999・12  
国史大辞典編集委員会『国史大辞典』吉川弘文館1979～1997  
竹本幹夫『観阿弥・世阿弥時代の能楽』明治書院1999・2  
本田安次『本田安次著作集 第一』三巻 神楽 錦正社1993・5  
1994・2  
本田安次『本田安次著作集 第十七巻 能・狂言・人形芝居ほか』錦正社1998・12

| 能柄       | 曲名   | 前        | 神楽を舞う主体    | 神楽の位 | 神楽の意義                        | 時間 |
|----------|------|----------|------------|------|------------------------------|----|
| 四番目      | 三輪   | 里の女      | シテ 女神霊     | 三輪明神 | 序あり(神楽前に神楽調べ)                | 夜  |
| 四番目(初番手) | 龍田   | 巫女       | シテ 女神霊     | 龍田姫  | 序あり(神楽前に神楽調べ)                | 夜  |
| 四番目      | 葛城   | 里の女      | シテ 女神霊     | 葛城明神 | 小書(神楽、大和舞)のときのみ。普通は序の舞。      | 夜  |
| 初番目      | 鱗形   | 里の女      | シテ 天女体     | 弁財天  | 喜多、金剛のみの曲。喜多では天女ノ舞か神楽。金剛では楽。 | 夜  |
| 四番目(初番手) | 現在七面 | 里の女      | シテ 化身体     | 竜女   | 序なし(初番目のときはあり)               | 夜  |
| 四番目      | 巻絹   | 巫女       | シテ 現在人(巫女) | 巫女   | 序なし、五段神楽(神舞部分も神楽)にも          | 昼  |
| 初番目      | 絵馬   | 伊勢の二柱    | ツレ 天女体     | 天鈿女命 | 序なし、五段神楽(喜多流)、二段神楽(室生流)      | 夜  |
| 四番目      | 室君   | 単式(前後なし) | ツレ 現在人(遊女) | 遊女   | 序なし                          | 夜  |
| 四番目      | 内外詣  | 単式(前後なし) | ツレ 現在人(巫女) | 巫女   | 序なし、神楽止め(神舞部分なし)金剛のみ         | 夜  |



## 境内散歩 ②

## 丹頂のいた神園

## 「鶴」の碑

境内の北奥に白米稲荷社が祀られています。白米稲荷社の西手から背後にかけて、ぐるりと玉垣で囲われて、いくつもの石碑が並んでいます。それら石碑の一番西端に、どうやら「鶴」と読める大きな文字が彫りこまれた青味をおびた自然石の碑が建っています。この石碑の文字については「何という字ですか？」という質問が参拝の方々から社務所へ寄せられます。

石碑表には「鶴」の文字の下に

「奉納有志中  
發 廣内 嘉兵衛  
岡本 利右衛門  
起 樋口 吉兵衛  
庄司 長兵衛  
人 田邨 丑松  
長谷川治兵衛  
執次  
祠官 寺井 種清  
南海堂□□書印」

と刻まれています。同碑裏面には「明治廿貳年三月建之」とあります。

石碑建立について執次をしたのは



「鶴」の碑 白米稲荷社西手玉

垣の内

祠官(宮司)寺井種清で、それより二年前の明治二十年八月に祠官滋岡功長が亡くなり、祠掌寺井種清が祠官に任命されたところでした。「鶴」の文字を書いた南海堂は、湯川梧窗(安政四年〜大正十三年)のことで、現中央区の石町に生まれ、名をなした書家でした。

明治二十二年三月

## 丹頂鶴三羽奉納

「鶴」の石碑が明治二十二年三月に建てられたことを手がかりに「本殿詰所日誌」を調べてみますと、ありました。明治二十二年三月二十四日の記事に

「丹頂鶴奉納奏上祭典献饌本殿七臺相殿各二臺奏楽 調 鶴齡社」と記されています。

では、実際に鶴が当宮に奉納されたのはいつかということになります。藤里年表に

「明治二十二年二月 鶴齡社より丹頂鶴三羽を奉納、園地に金網を新調してこれに放飼「諸講社諸組合有志名簿仮記」とあります。この「諸講社諸組合有志名簿仮記」が、残念ながら見つかっておりません。しかし、藤里年表のおかげで、三羽の丹頂鶴が明治二十二年二月に奉納されたことがわかりました。

さあこれで「鶴」の碑が丹頂鶴奉納を記念して建てられたことはほぼまちがいないと思われませんが、疑問

点も残ります。同年三月二十四日の「本殿詰所日誌」の記事で石碑建立について一言もふれていないのです。ただ、三月二十四日の奉納祭のときに石碑建立が間に合わなかっただけのことかもしれません。

※藤里年表 大正末年から昭和年三十年代まで大阪天満宮に奉職した藤里好古が作成した大阪天満宮の年表。

## 丹頂鶴のいた神園

さて、丹頂鶴が放し飼いされていた園地は何処だったのでしょうか。

これは幸いなことに明治三十六年四月刊の「大阪天満宮全図」にはつきりと描かれています。この境内図は、明治三十五年の菅原道真公千年祭を記念して刊行されました。鶴のいた神園の場所は現在の駐車場の一部です。園地の南の部分に金網がめぐらされて五羽の鶴が遊んでいました。

また同じ頃に撮影されたと考えられる写真があり、園地の松林の中に二羽、手前の玉垣のそばに三羽、やはり五羽の鶴が写っています。この写真は立派な台紙に貼られた特大型の写真で、内田写真館製です。撮影年月日は記載されておりませんが、他に一千年祭の記念に撮影された内

神園の丹頂鶴 明治三十五年頃 撮影



「大阪天満宮全図」部分 明治三十六年刊



「摂州天満宮社内之図」部分 一鶴が来る前の神園一  
この図には刊行年の記載が無いが、本殿前に紙商燈明講が明治十八年に奉納した青銅製灯籠が描かれており、園地に鶴が描かれていないので、刊行年は明治十八年から明治二十二年の間と特定できる。

田写真館の写真が同じような装幀であること、写真左奥に写っている神庫が美しく修築されていること、鶴が五羽写っていることなどで、明治三十五、六年頃撮影されたと考えられます。五羽の鶴というのには、わけがあります。明治二十二年に三羽の鶴が奉納され、「本殿詰所日誌」によりますと、その後明治三十年四月十六日に江之子島右近権左衛門より丹頂鶴二羽が献納されました。それで一千年祭が斎行された明治三十五年には、神園に丹頂鶴は五羽いた

のです。

丹頂鶴は今どこそ釧路湿原でしか見ることはできませんが、江戸時代から明治中頃までは、日本全国でその姿が見られたといえます。丹頂鶴の飼育について天王寺動物園に聞いてみましたところ、広さは百坪もあれば充分生きていきますし、明治二十二年から明治三十六年まで十五年の期間、飼育されていたことは充分考えられます。また、低い金網で囲っただけの園地に飼われていたのでしたら、羽を切るなり飛べないよう

に処置をして飼育していたのでしょう。そのために鶴の寿命を縮める心配は全くありません。エサは、ドジョウなどの魚と穀類を与えます。とのことでした。  
明治末ごろ、船場今橋の鴻池邸に丹頂鶴が飼われていて、大阪見物に来た人々が表屋の入口から鶴のいる中庭をぞき込んでいたとか、鶴の鳴き声が船場うちのかかなり遠くまで聞こえたとかの話が伝わっています。神園の鶴がいつごろまで飼われていたのかは、はっきりしませんが、

明治四十四年十二月六日の「本殿詰所日誌」に「月並詩会 兼題鶴斃喪」とあり、おそらく神園の鶴が死んだのでしょう。五羽が全部死んだとは考えられませんが、明治末年には、まだ鶴は飼われていたことでしょう。  
そのむかし、当宮の境内には、神園に五羽の丹頂鶴が、池にたくさんいるのが、神馬舎に神馬が飼われていて、実にこころ安らぐ神域になっていたようですね。

(文化研究所 近江晴子)



## 浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

六月課題「入梅田事」

悠山 永井達也

拂曉村家淫雨聲 青田笹水望窗横

農人未見唯飛燕 雖帶梅霖羽翼輕

(訓読) 拂曉の村家 淫雨の聲 青

田の水に笹るを窗に望みて横たう

農人未だ見ず 唯だ飛燕のみ 梅霖

を帯ぶると雖も 羽翼輕し

(語釈) 拂曉〓よあけ。淫雨〓なが

あめ。窗〓まど。梅霖〓梅雨。

(詩意) 夜明け長雨の音、青田に水

があふれるさまを窓辺でねそべって

見ている。農家の人はまだ見えない

が燕が飛んでいる。梅雨の雨を帯び

てもすすいと飛んでいる。

六月席題「風檐圍碁」

得虞 傲水 上田清文

午下風檐裏 手談欣有徒

人生開一境 正是苦中娛

(訓読) 午下 風檐の裏、手談する

に 欣ぶらくは徒の有るを。人生

一境を開く、正に是れ 苦中の娛み。

(語釈) 午下〓昼下がり。手談〓囲

碁をさすこと。

(詩意) 昼下がりの軒下に囲碁をた

のしめる友の有ること、人生の一境

地を開く如く、碁は苦しみの中の楽

しみである

八月席題「避暑林間」

得冬 生菖 氏野往子

求涼誘友往前蹤 四面蒼蒼萬綠濃

暢適林中銷伏日 塵縁隔絶白雲峰

(訓読) 涼を求め友を誘い 前蹤を

往く 四面蒼蒼として萬緑濃やかな

り 林中に暢適すれば 伏日を銷す

塵縁 隔絶す 白雲の峰

(語釈) 前蹤〓踏み後。小径。暢適

〓のんびりする。伏日〓一年中

で最も暑い日。塵縁〓俗世間とのか

かわり。白雲峰〓夏の雲、また白雲

は世俗を離れた人に譬える。

(詩意) 涼をもとめては友を誘って

小径を行く、四方は青々として草木

がしげっている。林の中でのんびり

していると伏日が消え去るようで、

世間との煩わしさもなく白雲の峰が

見える。

十月課題「客中書懷」

芳水 荒瀧宏一

類齡七十客人間 顧愧浮萍未得閑

悲喜相交催感慨 孤蓬何處夢青山

(訓読) 類齡七十 人間に客たり

顧みて愧ず浮萍 未だ閑を得ず 悲

喜相交へて感慨催し 孤蓬何れの処

にか青山を夢む

(語釈) 類齡〓年寄り。人間〓俗世

間。客〓人のこと。浮萍〓うきくさ。

自分に譬える。孤蓬〓蓬は日本のヨ

モギではなく葉が枯れると風にふか

れて転がっていく草。自分に譬える。

青山〓青々とした山。一説に男子の

死ぬ処

(詩意) 衰えた七十歳の私は世間の

狭間で生きています。人生をふり返

ると浮き草のようであらう閑もない。

喜び悲しみが交又する。孤蓬のよう

に転がり続ける、青山を夢見ながら。

御伽衆  
藤棚教室

天満神社 (長洲天

満宮・尼崎市長洲)

の氏子さん達より、

「ぜひうちの神社で

もしじみの藤棚を作

りたい」とのご連絡



があり、九月十八日に

氏子の皆さん十名ほど

が文化研究所を訪れま

した。三人の御伽衆が

行った説明に熱心に耳

を傾け、その後しじみ

藤作りを体験されまし

た。「神社に藤棚がある

のでそこに飾りたい」

と意欲を見せておられ

ました。

## 奥田民生さん、ライブ成功祈願

十月十三日、FM802の番組、

「ROCK KIDS 802」の

生中継が天満宮境内で行われました。

エスコート役のDJマーキーさん

と登場した奥田さんは、DJ西田新

さんと十月三十一日に広島で行われ

る一人股旅ライブへの意気込みなど

を語り、中継後、ライブの成功を祈

願して正式参拝されました。



## 御文庫曝書

十月十五日、御文庫講の皆さんのご尽力によって、毎年恒例の御文庫の曝書が行われました。

七年目六回となる今回は、去年にひきつづき漢籍の部でした。

御文庫講の二十五名の方々は、十時に参拝された後、午前、午後と二度に分けての緻密な作業を担当されました。梅香学院の教室いっぱいに広げられた御文庫蔵書の数々は、窓から入ってくる秋のすがすがしい空気に満たされていました。



## 大阪天満宮献詠

平成十六年下半年秀歌

風月社

朝露にしとど濡れたる葛の花  
踏みわけのぼる子佛峠

關俊一

音もなく葛のあらしのうねりつつ  
うら葉をたつる白き秋風

佐野秀子

生ひ茂る葛の葉風に翻へり  
葉の裏しろく夏日に映ゆる

友岡美佐子

老二人淋しく暮す隣家に  
孫の来たるか甲高き声

森本美也子

大塔の宮かくまひし山峽の  
つり橋いまも民わたしをり

松村曉三

祖母の手に抱かれし幼な一匙の  
葛湯に泣きやみ笑顔を見する

宝藏寺京子

朱鷺色の蹴出しも艶に阿波踊  
映像見つつ手をかざす我

太田たか子

お隣と往き來なすうち生け垣の  
一ヶ所いつか小径となりぬ

入江千鶴

## 西川きよしさんの お孫さん、七五三詣に

十一月十五日、西川潔氏（元参議院議員、タレント）のお孫さんが七五三参拝に來られました。

かわいらしい着物に身を包んだ西川友里ちゃん（三才）は、潔さんの長男、西川忠志さんのお子さん。正式参拝ではちよつと緊張気味だった友里ちゃんでしたが、参拝後、ご家族の皆さんに囲まれた記念撮影でのすてきな笑顔が印象的でした。



ブランコのように揺らして釣橋を  
腕白坊主とくどく渡る

松村龍太郎

うらなる里の釣橋行く姥の  
背籠に香る笹百合の花

三本さとる

週末に隣の子らのはしやぐ聲  
ききつつひとり夕支度する

岩城富子

お隣の犬あいらしきフエンスより  
鼻のぞかせてしつぽを降りぬ

永田民子

風邪氣味の夕べ葛湯に生姜入れ  
母は吹きつつ飲ませ呉れたり

中山里江

十津川の峽にかかれる釣橋の  
ゆるるを渡りし遠き想ひ出

塩小路光亨

経緯も機<sup>はた</sup>の故障も支へ合ひ  
隣は西陣綾錦織る

浅井與四郎

## 人事任免

《退職》平成十六年八月三十一日付

権禰宜 岡本浩明

《転任》平成十六年十月三十一日付

権禰宜 大宮聡

（生國魂神社へ）



復興は、自衛隊の参事館にて毎年200年を超える古本を始め、その他各種50冊以上の絵本や大正天皇御即位の宮中『天璋御後供け帳』『お遊覧入部』（大正御指定文藝類）も展示公開致します。



来は、当宮を創祀されまし  
た村上天皇御治世の申年、  
平安京に疫病が流行した際  
に、天皇御自ら梅干入りの  
お茶を召されて病を治され  
たとの伝承によります。

ぜひ新年に「幸うめ」に  
よって幸多い年をお過ごし  
下さい（一袋五〇〇円）。

大盆梅展



平成17年1月29日(土)～2月27日(日) 午前9時30分～午後4時

夜間拝観  
2月12日(土)～2月20日(日) 午後8時まで

拝観料／大人500円(中学生以上)小学生300円・幼児無料



## 大阪天満宮

TEL.06(6353)0025  
http://www.tenjinsan.com

●最寄駅は京浜東北線・大森駅  
大森駅(京浜東北線)下車 北西へ徒歩約15分



願文中、大宮大塚宮境内や寺内の古製図である天神橋跡古跡画に於いても争奪を厭し物がござります。

大阪天満宮社報  
てんまてんじん 第47号

平成16年12月20日印刷  
平成17年1月1日発行

發行人 寺井種伯

發行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 061635310025

印刷所 木村印刷株式会社

「昨午の第一回一てんま天神梅まつり」は大好評をいただきましたが、本年は昨年にも増して、皆様にお楽しみいただこうと、関係者一同、知恵を捻っております。

お誘い合わせのうえ、御参拝いただきますようお願いしております。